

城を歩く会 7月定例会「夏季研修会」

江戸城堀割りと小廻し帆船・五大力船

平成27-7-20 山岸弘明

次回定例会は「江戸の町」を川の上から眺める

1) 9月定例会のご案内

① 9月12日(土曜日) 11時10分東京駅北口、日本橋口、永代通り横断、徒歩1分常磐橋小公園集合(日本ビル横の小公園=地図にないので注意してください)

*水上バス定員64名=申し込みを忘れないでください

② 日本橋発着場「東京水辺ライン、水上バス・カワセミ」乗船

「江戸の町」を川の上から眺める

*「川めぐり、橋めぐり」コース(現地案内は船の案内テープになります)

日本橋川、神田川(江戸城外堀=御茶ノ水まで)、隅田川(浅草、桜橋まで)

③ 見どころ=(日本橋川)日本橋、魚河岸跡、堀割石垣、船繋ぎ、木更津河岸跡、鎧の渡し跡、亀島川、壺岸島新堀、湊橋

(隅田川)永代橋、万年橋、新大橋

(神田川)柳橋、浅草橋御門、昌平橋、聖橋、御茶ノ水

(再び隅田川)総武線鉄橋、両国橋、蔵前幕府米蔵跡、浅草、桜橋Uターン、スカイツリー

④ 日本橋を歩く=(十思公園)伝馬町牢屋敷、吉田松陰終焉の地

15時ころ現地解散(日比谷線小伝馬町駅前)、JR新日本橋まで徒歩5分、神田まで10分

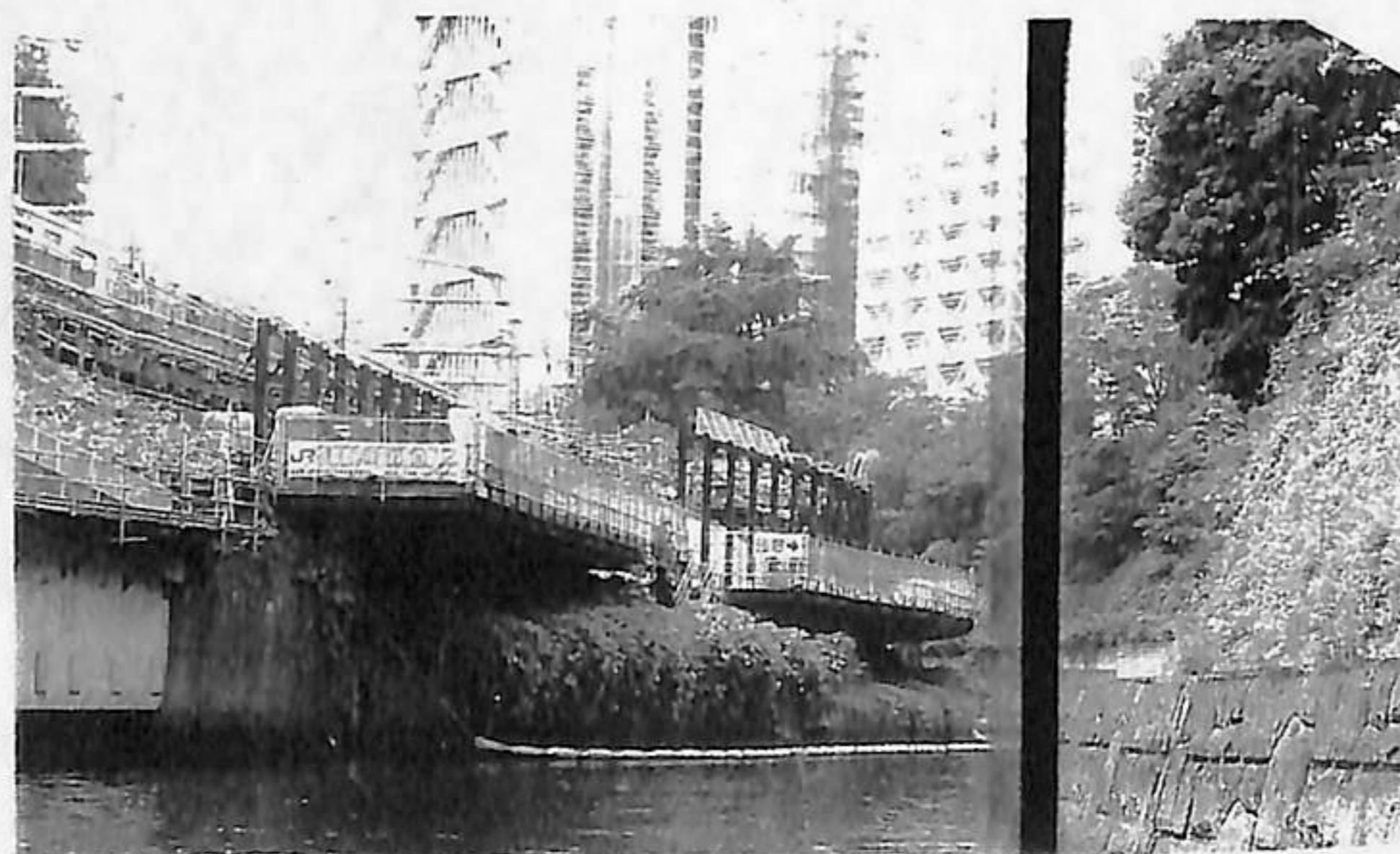
全長 16.5メートル 総トン数 17トン

定員 64名(船内座席数39席)

水上バス「カワセミ」



日本橋川と神田川
カワセミ



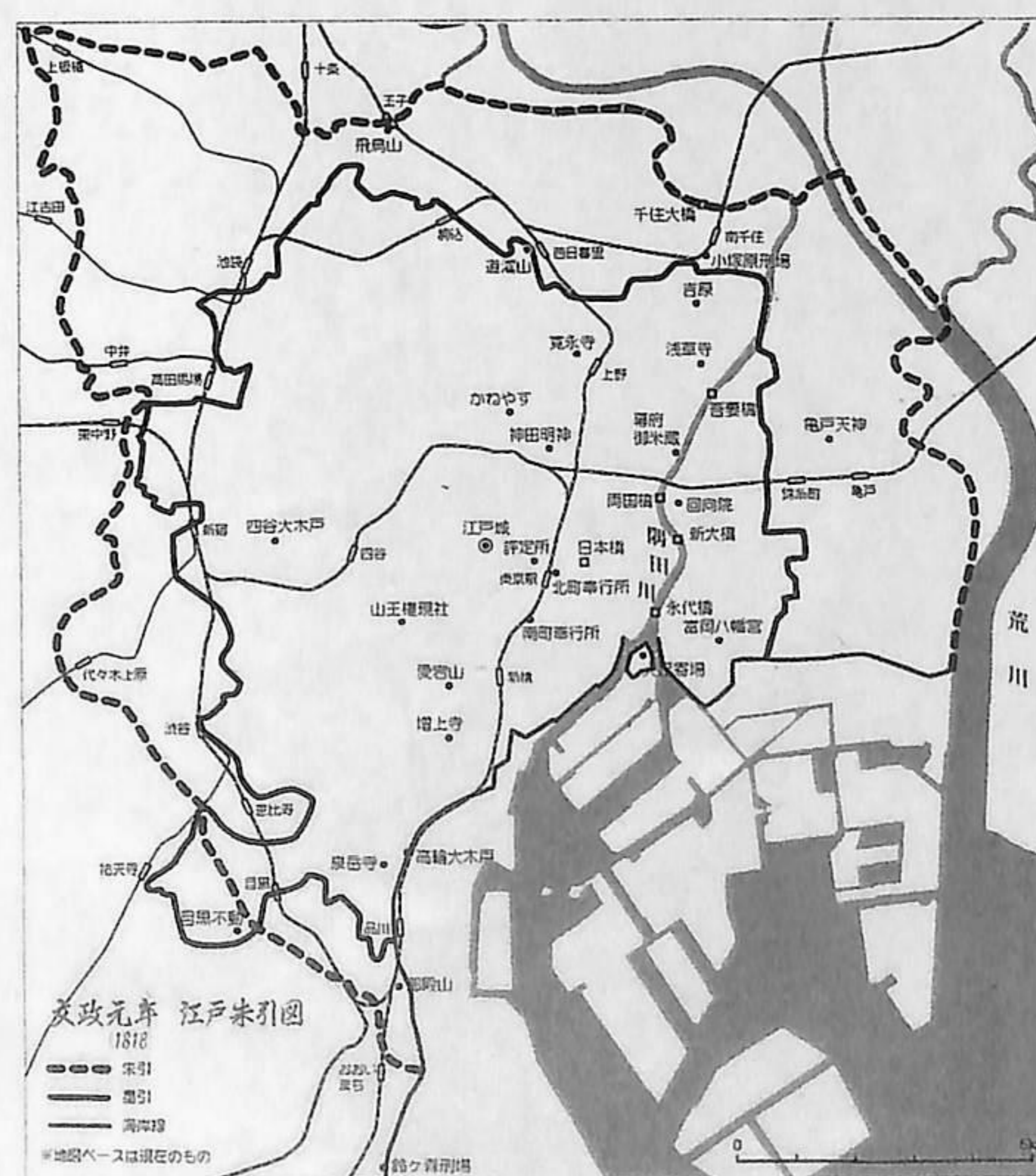
明治2年図からみた江戸・東京

1) 明治2年東京図とその時代

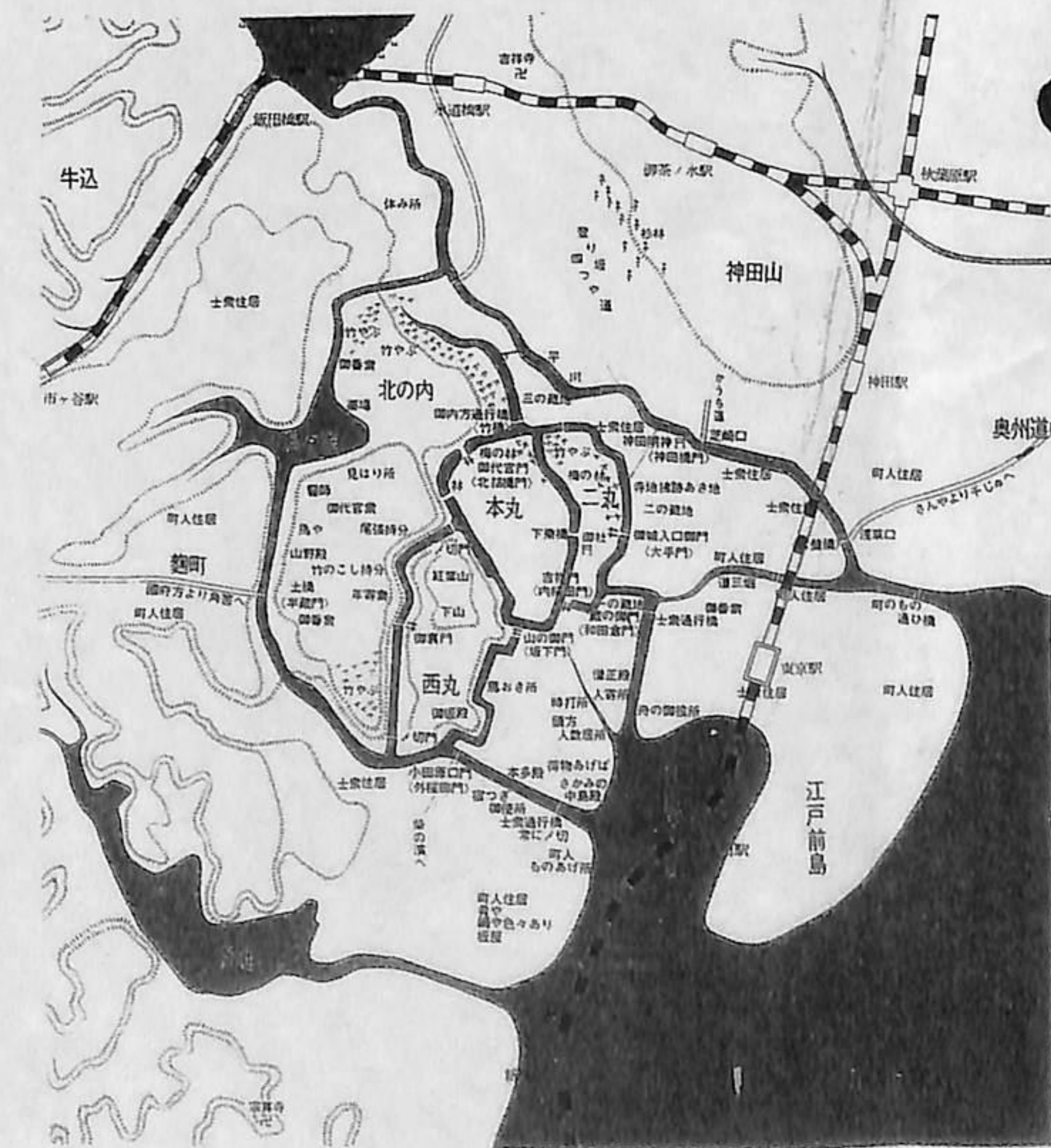
- ① 「官版」東京絵図。明治2年初秋新刻、東京馬喰町四丁目、絵図面御用、吉田屋文三郎官版(広辞苑)。「官府の出版物、または印刷物」。新政府公認を強調している。
- ② 地図の前年、慶応4年(明治元年1868)徳川幕府の本拠・江戸城が開城、江戸を東京と改称して年号も明治と改まる。10月徳川宗家を継承した紀伊慶福(家達)が駿府50万石に転封、家康入府以来およそ300年に及んだ徳川氏の「覇都・江戸」がここに終結する。
- ③ 翌明治2年(絵図の年)3月天皇が京の御所から江戸城へ移り、なしくずし的に東京遷都が実現していく。
- ④ 明治2年図に目をやる。江戸城は天皇の仮御所ではあったがあえて「御城」のまま、幕閣や譜代名門家が軒を連ねた西の丸下(皇居外苑)や丸の内は新政府の官庁街や明治元勲邸に替わり、退去した旧旗本邸に明き屋敷がめだっている。
- ⑤ 一方、築地に外国人居留地が誕生し、町は新しい時代の息吹が鼓動した。新旧時代が交錯する明治維新时期に当時世界最大都市「江戸」とその物流本拠地「江戸港」の残像を探る。

2) 明治2年東京図からみた「江戸城」と「江戸市中」

- ① 狭い意味での江戸城=皇居、吹上御苑、東御苑、北の丸、皇居外苑、丸の内、大手町
*広い意味での江戸城=浜離宮(外郭)、新橋から虎ノ門、溜め池、赤坂と続く外堀通りと、四ツ谷から市ヶ谷、飯田橋、水道橋、御茶の水、秋葉原、浅草橋間のJR中央線(旧江戸城外堀、神田川)内すべて。千代田区、中央区およそ20平方km。
- ② 大江戸八百八町=延享年間1678町。人口100万人、ロンドン、パリ凌ぐ世界最大都市。
*朱引き(文政元年に示された江戸御府内の公式見解)=東 中川限り、西 神田川限り、南 南品川町を含む目黒川あたり、北 荒川石神井川下流限り
*墨引き=町奉行支配場。寺社勧化場、江戸払い構え場、札懸け場など複雑支配
- ③ 盛り場、名利など=日本橋、上野寛永寺、芝増上寺、浅草浅草寺、蔵前
- ④ 「江戸港」=墨田川沿い内岸、広い意味での江戸城内に掘り巡らせた「堀割り」
- ⑤ 「幕末、維新遺跡」=品川砲台と台場群、仮皇居と明治元勲邸、外国人居留地、西洋帆船



江戸朱引きと墨引き



慶長7年江戸図

大消費地江戸の台所を支えた物流本拠・江戸港

1) 鎖国で国内航路と諸国廻船が発達

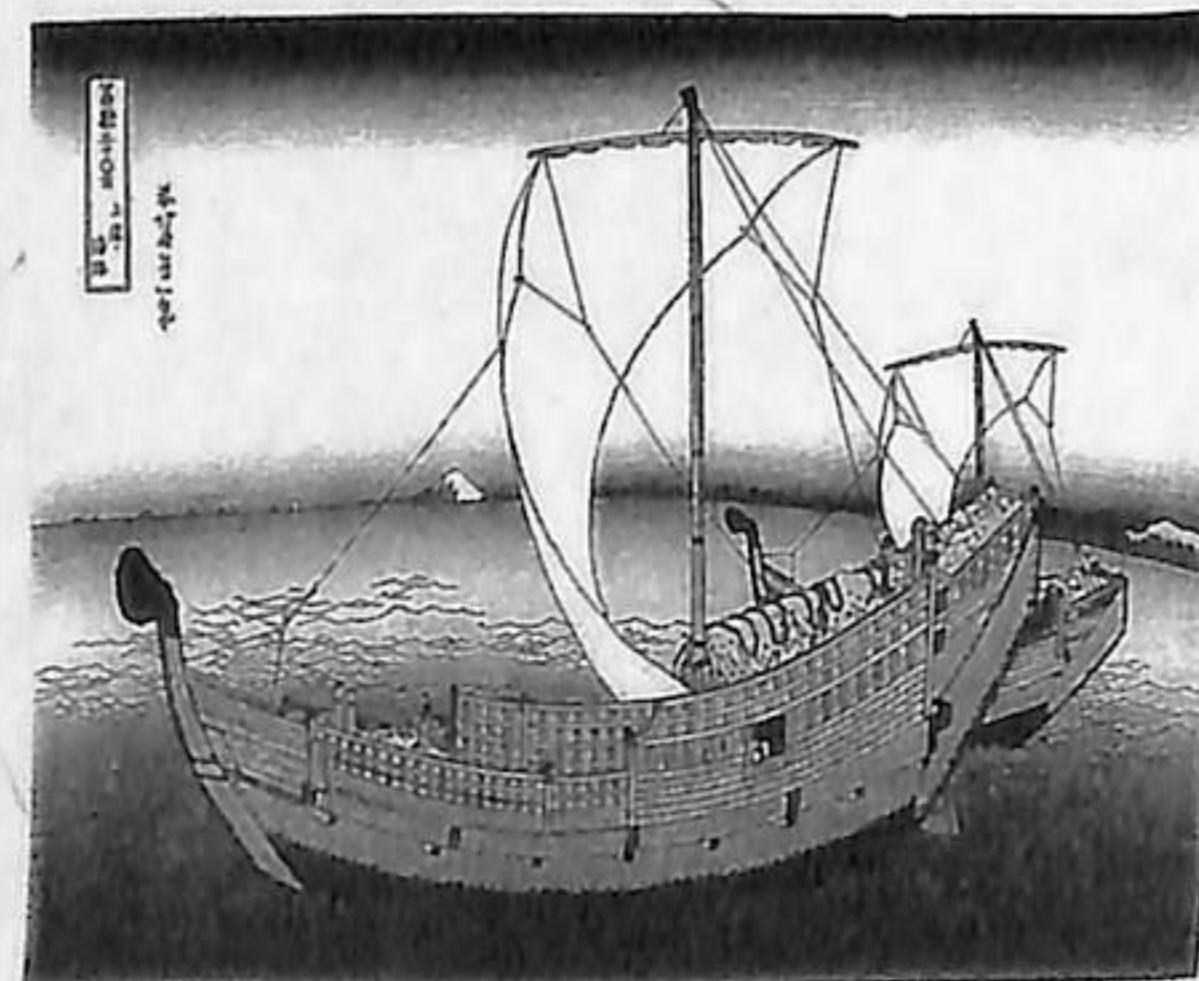
- ①和船=日本古来の形式の木造船のこと。船名に冠せられた「丸」は城郭用語の「曲輪」で、海に浮かぶ城を意味している。
- ②船の歴史は太古の丸木船、いかだ船に始まる。のち材木や板を組み合わせた構造船となり、風力を利用した帆船へ進んだ。
- ③帆船は大量輸送に適し、早く、経済コストに優れたことから物流の主流となった。
- ④江戸時代「鎖国令」で大型船は禁止されたが、江戸、大坂二大都市の発達で、東廻り、西廻り航路が整備され、菱垣廻船、樽廻船、弁才(べさい)船など1000石クラスの「諸国廻船」が活躍した。関西から江戸に運ばれた酒や醤油などの生活物資は「下り物」として珍重された。
- ⑤このころ、地中海を中心に発達した西洋船は、多数のマストを掲げた大型帆船の時代をへて、19世紀「産業革命」による「蒸気、鉄船」時代を迎えていた。
- ⑥嘉永5年アメリカ海軍ペリー提督率いる4艘の蒸気船「黒船」の来航は、日本を震撼させて「開国」の道を選択させることになる。

江戸の小廻し帆船として独自の進化をとげた五大力船

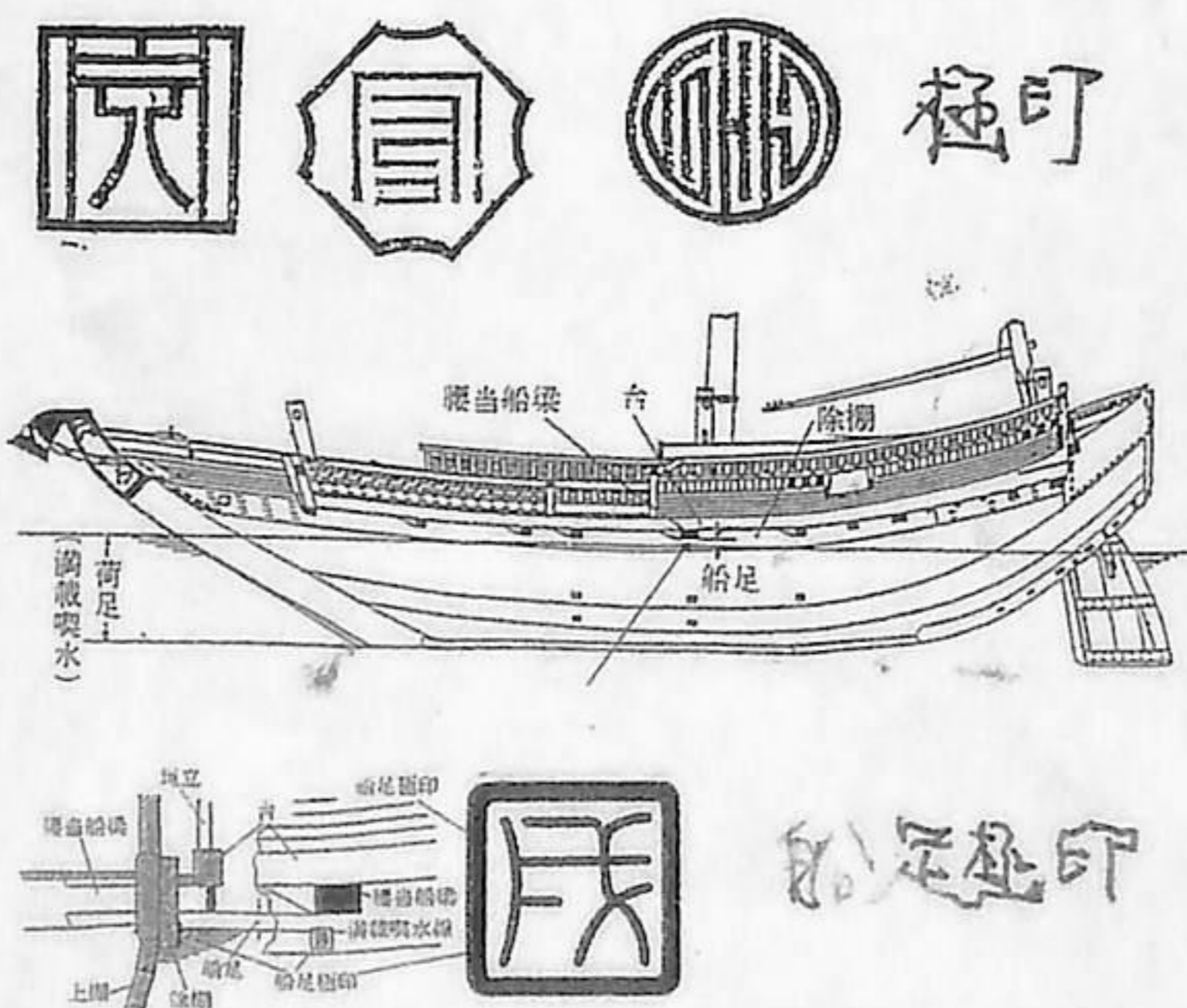
- ①江戸時代始め、関東では利根川の高瀬船と中型帆船「五大力船」が登場した。
- ②五大力船は江戸と地廻り供給地を結ぶ小廻し廻船で、海川両用船として独自の進化を遂げた。
- ③武蔵、伊豆、相模、安房、上総、下総の海港から江戸へ、米穀や海産物、肥料、木材、薪炭、わら製品等の地方物産を運び、帰り船に衣料、雑貨等の生活物資と「江戸文化」を持ち帰った。
- ④本来は江戸湾を渡る海船だが、江戸幕府は川船奉行の支配下に置いた。幕府は新造船、船改めの都度、極印(焼印)を付し、通船の時、船役を徴収した。
- ④五大力船は全長10~20m、積み石50~200石、乗り組み員3~5人の中型帆船で、その特徴は平底、一般の廻船にくらべて喫水が浅く、舷の外側に長い棹走りを設けた。
- ⑤江戸湾は風力を利用して帆走し、江戸市中では棹を使った。上総方面から海上8里、3、4時間、自転車並みの速さだった。逆風でも帆を操ってジグザグ走りに前進したが、無風だと動かず1日掛りのこともあった
- ⑥大型の諸国廻船は江戸湾に入れず品川沖で積み荷を下ろしたが、五大力船は市中の堀割りにも乗り入れた。しかし橋は潜れず、隅田川河口の佃島前で帆を降ろした。わずかな乗組み員で500kgもある帆の上げ下げは難作業で、バランスや滑車を応用した。
- ⑦房総の五大力船は川船番所のある霊岸島角から亀島川に入り日本橋川を上った。帰りは霊岸島新堀を抜けて隅田川の永代橋際に出た。亀島川がせまく一方交通になった。
- ⑧それぞれ所属港ごとに船繋ぎ場があった。木更津船は江戸橋際の木更津河岸で、行徳や上総、下総船は小網町周辺の船繋ぎ杭に船を留めた。
- ⑨荷物の積み下ろしは江戸港の舢舨行事に所属する小網町付け船仲間が行ない、配達は「車力」と呼ばれた人夫が大八車で運んだ。



舟



五大力船



極印

丸

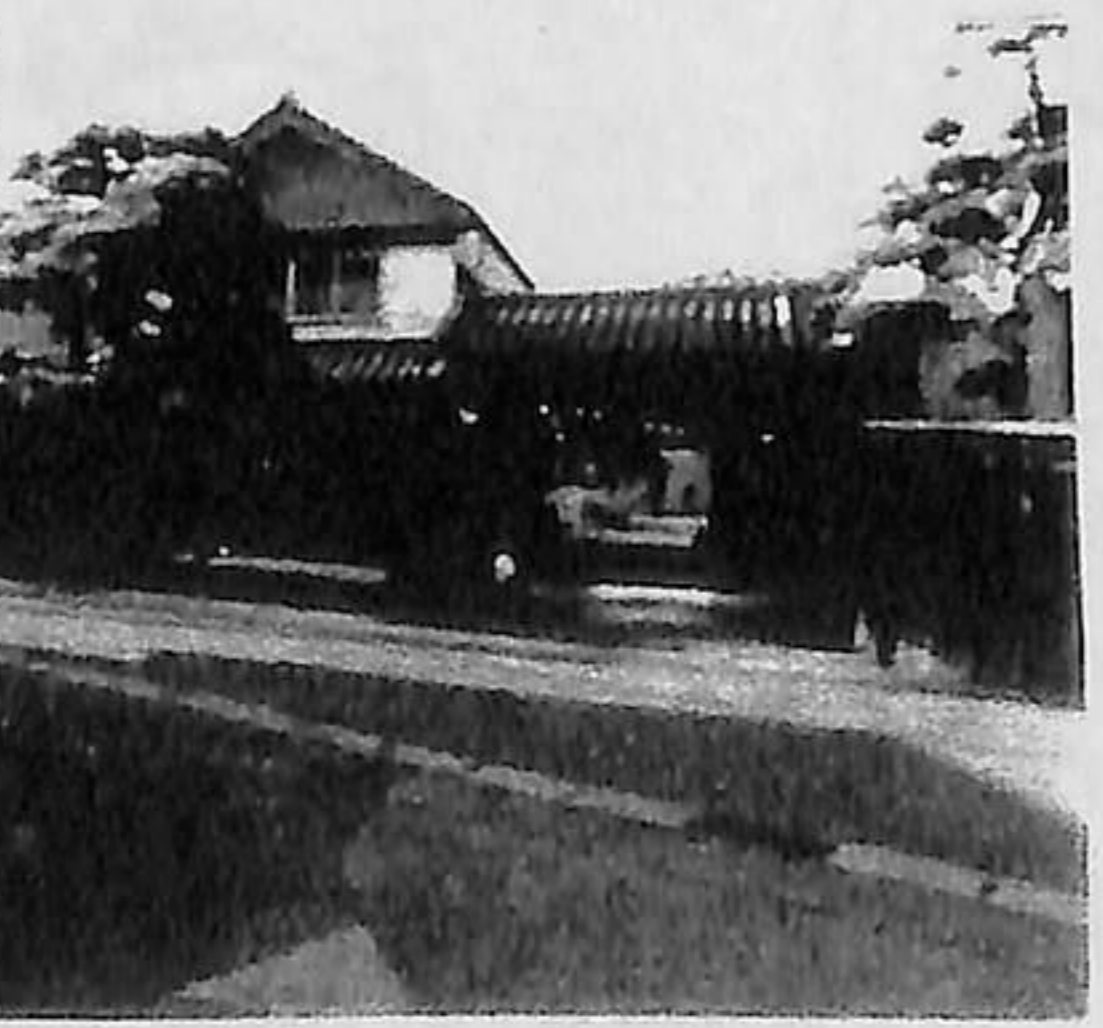
八幡宿の旧戸長宅に伝来した船改め所文書

1) 明治維新时期1年分の五大力船公文書を大量発見

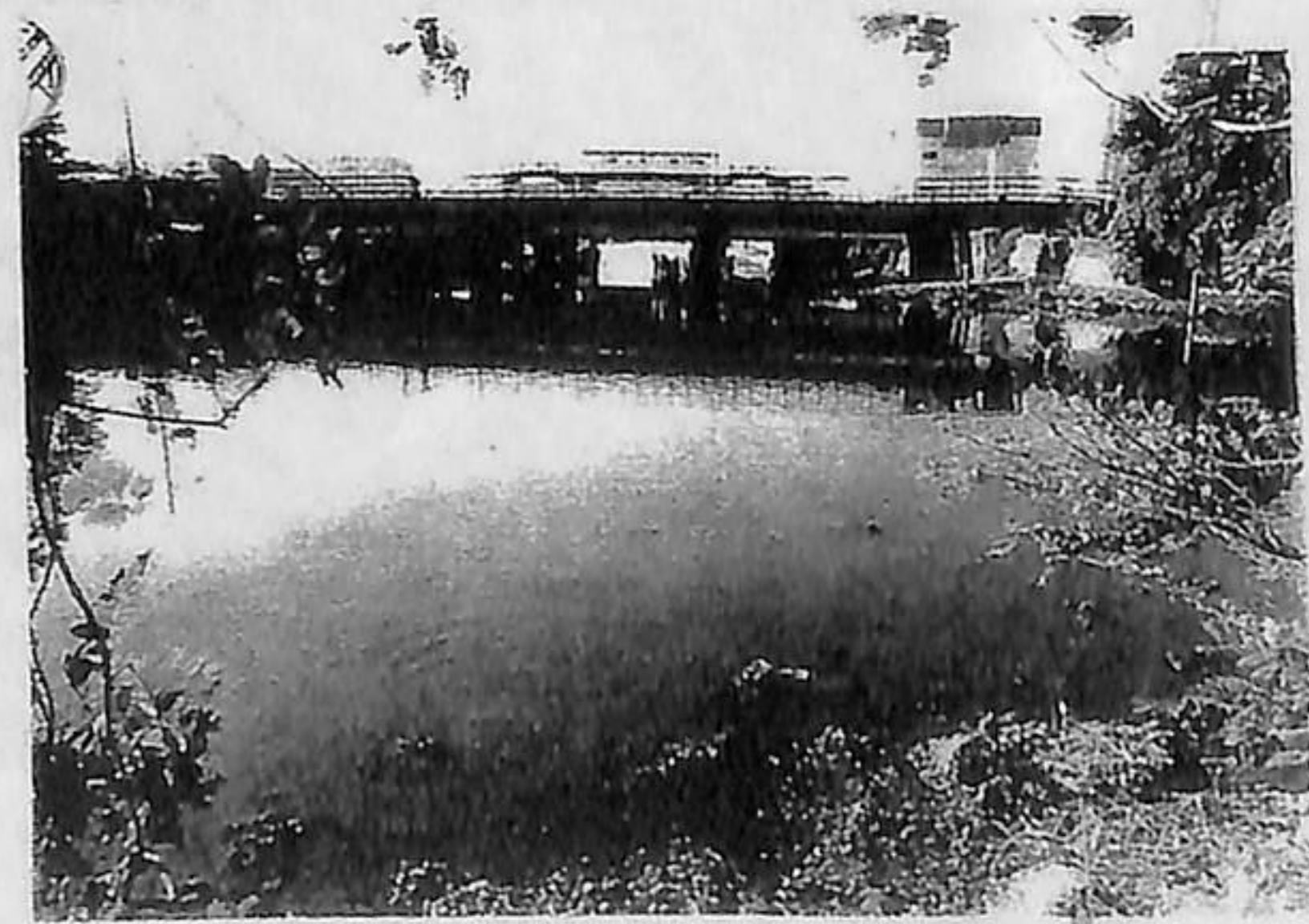
- ①江戸時代始めから大正時代まで、江戸、東京湾を中心におよそ3世紀半に渡って活躍した五大力船だが、資料が極端に少なく、ほとんど解明されていない。
- ②本講では「市原の古文書研究会」の旧八幡宿戸長文書と飯香岡八幡宮文書調査資料から、江戸時代市原地区最大の港町として発展した八幡港、幻の「五大力船」を紹介する。
- ③市原八幡・市川本店文書=10代崇神天皇の後胤とされる飯香岡八幡宮創設以来の旧社家。江戸後期に酒類販売と醤油製造所を兼業、明治維新直後戸長、3代に渡って町長や県議会議員等を務めた。八幡地区最大の旧家で、現在も広大な屋敷地に江戸後期建造の門や帳場、母屋に居住されている。研究会では3年前から当家文書の調査を実施している。江戸後期の八幡村文書、明治維新期の戸長文書、家業文書など総数10万点に達する見込み。
- ④戸長文書に含まれた五大力船関係史料は明治6年から1年間だけ存在した「港内規則」による公文書で、五大力船、舢舨台帳や1航海ごとの積み荷詳細を記した出帆届け(申請書)や許可台帳と帰帆免状などが含まれている。
- ⑤飯香岡八幡宮文書=白鳳4年創建、上総惣社とされる古社で頼朝伝説や柳権神事が知られる。家康以下の歴代将軍家が150石を寄進、室町中期建造の本殿は国の重要文化財で、研究会で伝来全文書を解読している。

2) 八幡港は慶長19年に始まり、昭和32年の海岸埋め立てで終わる

- ①南町みおの開削=慶長19年、飯香岡八幡宮みこし汐ごり海面除地(神社前の干潟地)に、当時八幡村の本多正信、正純父子、永井尚政3領主年貢米津出し港として南町みおと蔵屋敷、みお筋(上幅12間、下幅8間、長さ480間)を開削、年貢米の津出しを始めた。
- ②浜本町みお=江戸時代始め雁田川(小川)河口に船溜りとみお筋を拓いて民間五大力船専用港を開港、港町の整備にともない八幡港の中心となる。町並みに運送宿(船問屋、船宿)や船持ち、乗組員、舢舨(はしけ)人、船大工、江戸と交易する穀物商、薪炭商、反物などの大型商店が立ち並び、風呂やはたご、飲食店等町のほぼすべてが何らかの形で港作業に係った。
- ③八幡港は遠浅の干潟地のため港での荷物積み降ろしができず、船をいったん海上の船繋ぎ杭に停めた上で舢舨が中継した。また海から船だまりへの通航も満潮を選んで出入りした。
- ④五大力船の最盛期は明治から大正時代まで。大正後期には物流の座は自動車と鉄道を利用した陸運へと移行していた。昭和はじめ仕事を失った五大力船は次々と姿を消した。
- ⑤一方八幡海岸ではのり養殖が始まり、海水浴、潮干狩りで賑わう。戦後の高度成長時代、東京からの観光バスが八幡中学校校庭の臨時駐車場を埋め尽くした。八幡港にはすでに五大力船の姿はなく、レジャーボートとすだて船、海苔とり舟が占拠していた。
- ⑥昭和31年、千葉県は「京葉臨海工業地帯」計画にともない漁業権買収を提示。翌32年八幡五所漁業組合が受け入れを決定すると八幡港はアッという間に埋め立てられ、工場の巨大プラントが相次いで建設された。



江戸明治のたむすい 食む市川本店



八幡港跡

3) 江戸中期「本株 30 艘、当時 12 艘」、明治 6 年「五大力船台帳」は 18 艘を記録

①江戸時代市原には八幡、五井、青柳、今津、姉ヶ崎、椎津の 6 港があったが、五大力船の船数は資料が存在せず不詳、「市原市史」は「八幡、嘉永 4 年 (1851) 28 艘」とするが出典を明記していない。

②天明 7 年 (1787) 市川本店文書「八幡村村鑑明細帳、この末に船数明細書付けおく」(古文書研 発見文書) = 本株 30 艘 (鑑札所有者)、当時 12 艘 (実稼動)

* 明和 6 年幕府直轄領船主名 = 平兵衛 2、吉十、太右衛門、幸助、伝八、源七、長兵衛、与平次

③寛政 6 年 (1794) 飯香岡八幡宮大絵馬「八幡村五大力船船揃え図」 = 船名付きで 13 艘

* 船名 = 観音丸、稲荷丸、飛鳥丸、ヤマ善、護念丸、仁徳丸、竜王丸ほか

④江戸時代、五大力船の登録数の多くは権利だけで、稼動船は半分程度であった。村鑑明細帳の 付け書きが実態を記しているといえる。

⑤明治 6 年 (1873) 市川本店文書「木更津御県庁船印鑑連名帳 (船改め所五大力船台帳)」 = 18 艘

* 最大 = 日本形、高砂丸、140 石積み、松田喜三次船、乗り組み 5 人 (沖船頭岩田万蔵)

平均 = 日本形、神徳丸、100 石積み、石橋清次郎船、乗り組み 4 人 (直乗り)

最小 = 日本形、明玉丸、60 石積み、大宮常太郎船、乗り組み 2 人 (直乗り)

* 明治 6 年「五十石以下の船」、明治 7 年「はしけ船所持の者」

4) 「港内取締り規則」の概要とその記録

①明治 6 年 1 月制定「港内取締り規則」 = 東京、千葉などの各府県の主要港に船改め所を設置、 出入港に際し、積み荷目録、船免状、船税鑑札を検査し、停泊税を徴収した。八幡宿では戸長 (役場) が船改め所業務を兼ねた。

②翌明治 7 年 11 月「国内回漕規則」制定にともない内務省駅通省所管と代わり戸長は任を免じ られた。わずか 1 年間だけの規則ではあったが、江戸時代、明治時代を通じ五大力船の 1 航海 ごとの積み荷などを総括管理した時期はこの 1 年間しかなかった。

②出入港フロー 別掲

③出帆届け = 船主が船改め所に提出した申請書。413 件

* 出帆御届書 (別掲の一例)

一泉徳丸、積み石 80 石 小林七次郎船、直乗り外 2 人
一米 20 俵なり、一土釜炭 300 俵、一から竹 60 束なり、一古柱 100 本
送り状 1 通 船客 (空白)

右は東京府港まで出帆仕りたく旨、免状御願ひ申し上げ候。以上
戊 1 月 5 日 右宿 小林七次郎 (印)

戸長市川甚太郎殿

④出帆免状台帳 = 船改め所 (戸長) の受付、免状発行台帳。全 7 冊、ほぼ 1 年間完全揃い

* 出帆御届書の写し (後半は免状の割り印付き)

⑤出帆免状 = 船改め所が届け書に基いて発行した到着港にあてた免状。本来はあて先に提出され るが出航取り止めで発行元に残った



* 千葉県船改め所 (八幡宿) 出帆免状 (刷りものの免状紙に加筆 = 別掲の一例)

一日本形高砂丸、積み石 140 石 乗組み人沖船頭岩田万蔵外 4 人

積荷 三六むしろ 470 こ (束)

ただし送り状 1 通 船客これなし

右は本日当所出帆、その港へまかり越し候段、届出候あいだ免状相渡し候なり。

明治 7 年 3 月 9 日 上総国市原郡八幡宿 戸長 市川甚太郎 (印)

東京府船改所

(加筆) この分風シケにつき書き直し (強風のため欠航)

⑥帰帆免状 = 帰り船の相手船改め所発行の「出帆免状」(232 件、およそ 40% を欠落)

* 「東京府船改め所 (はしけ宿行事) 出帆免状」(一部刷りものの免状紙に加筆)

* 「神奈川県船改め所 (YOKOHAMA) 出帆免状」(一部刷りものの免状紙に加筆)

⑦その他の五大力船関係戸長文書

* 明治 6 年「申年分東京納船 (税金) 取り立て帳」、明治 7 年「船税金上納願ひ」

* 明治 7 年「船客名前留め」「旅宿取り調べ帳」「旅人取り調べ控え」(一部) などがある

5) 月に平均 3 往復、江戸へ米や薪炭を運び生活物資を持ち帰った

①八幡宿からの「出帆免状」と東京と横浜からの「帰帆免状」を対比させることで、船ごとの航 海サイクルがわかった。

②明治 6 年 10 月にもっとも活動した船は太神丸 (100 石) の 5 往復で、平均 3 往復であった。東 京滞在は精々 1、2 日だが、天候次第で 5 日ほどになることもあった。この間船乗りたちは小網 町のはしけ宿に泊った。買い付けなどの商社行為は禁止、商店は江戸の間屋に発注して、当番 にあつた番船が運んだ。

③積み荷は港によってまちまちで八幡からは米 (年貢、町米)、材木、薪、炭、わら製品、肥料 を運んだ。江戸時代、木更津と船橋、行徳以外での船客は認められず、明治維新に至ってよう やく解禁された。

6) 五大力船の最後 ~ まとめ

①江戸時代、諸国廻船や川船を中心とした水運による商品流通の拡大は日本経済の発達に大きく 貢献した。筆者の住む房総八幡はかつて五大力船が江戸との交易の窓口として発展した市原最 大の港町であった。古い町並みは昔のままだが、海は 50 年前に埋め立てられて「潮の香り」 一つ漂うこともない。「八幡港」も「五大力船」もすでに死語であった。

②八幡地区の「郷土史研究」、多年の念願がかない、3 年前にさる旧家の蔵を開けていただくこと になった。地方文書 10 万点の中に「村鑑明細帳」や「五大力船資料群」があつた。現在、資 料整理と解説、解析中であり順次活字本として公開している。 ご協力、ご支援をいただいた資料提供者の市川本店さんに感謝申し上げます。

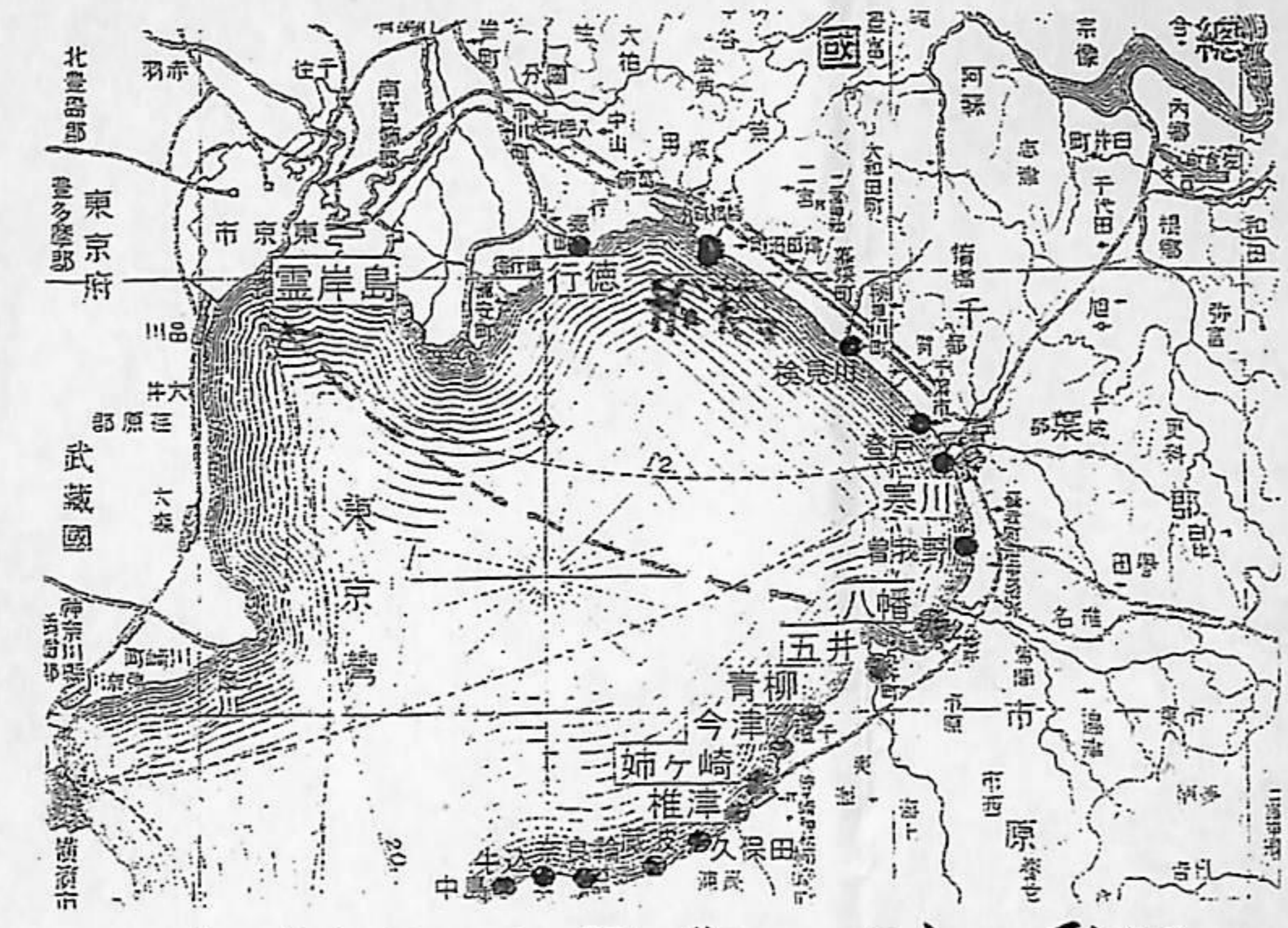
八幡宿の歴史 第十二話 八幡港と五大力船の活躍 江戸時代の八幡は市原最大の港町として繁栄した。その中心は五大力船と呼ばれた中型帆船であった。飯香岡八幡宮が所蔵する「八幡村五大力船揃え図」(寛政六年)には満帆に帆を膨らませた十三艘が描かれており、また天明七年「八幡村村鑑明細帳」では「本株(鑑札)三〇艘、当時(実働)十二艘」としている。わずかに、四人で一〇〇石もの荷物を運ぶ、その力強さを「五大力菩薩」に例えられたという。八幡の中心地浜本町には運送宿と船主、船乗り、荷役はしけ人、船大工のほか穀物商、薪炭商、反物などの問屋倉庫が並び、風呂や旅館、飲食店等町のほぼすべてが港に係った。雁田川河口に築いた船だまりを母港としたが、積み荷は海上で解(はしけ)船が中継した。江戸までは海路八里、順風なら三、四時間、市中の堀割りには帆を降ろして棹で亀島川と日本橋川を上り、小網町河岸に船を繋いだ。積み荷は内陸部から運ばれた年貢米や薪炭が多く、帰り船で衣類や雑貨等の生活物資と「江戸文化」を持ちこんだ。江戸時代の八幡は市原の経済、文化の中心地として発展していった。(山岸弘明 主権事業「八幡史学館」講師)

飯香岡八幡宮の大絵馬
「八幡村五大力船揃え図」

明治6-7年、五大力船荷物運送の流



八幡村五大力船船揃之図



房総方面の主要港と江戸の航路

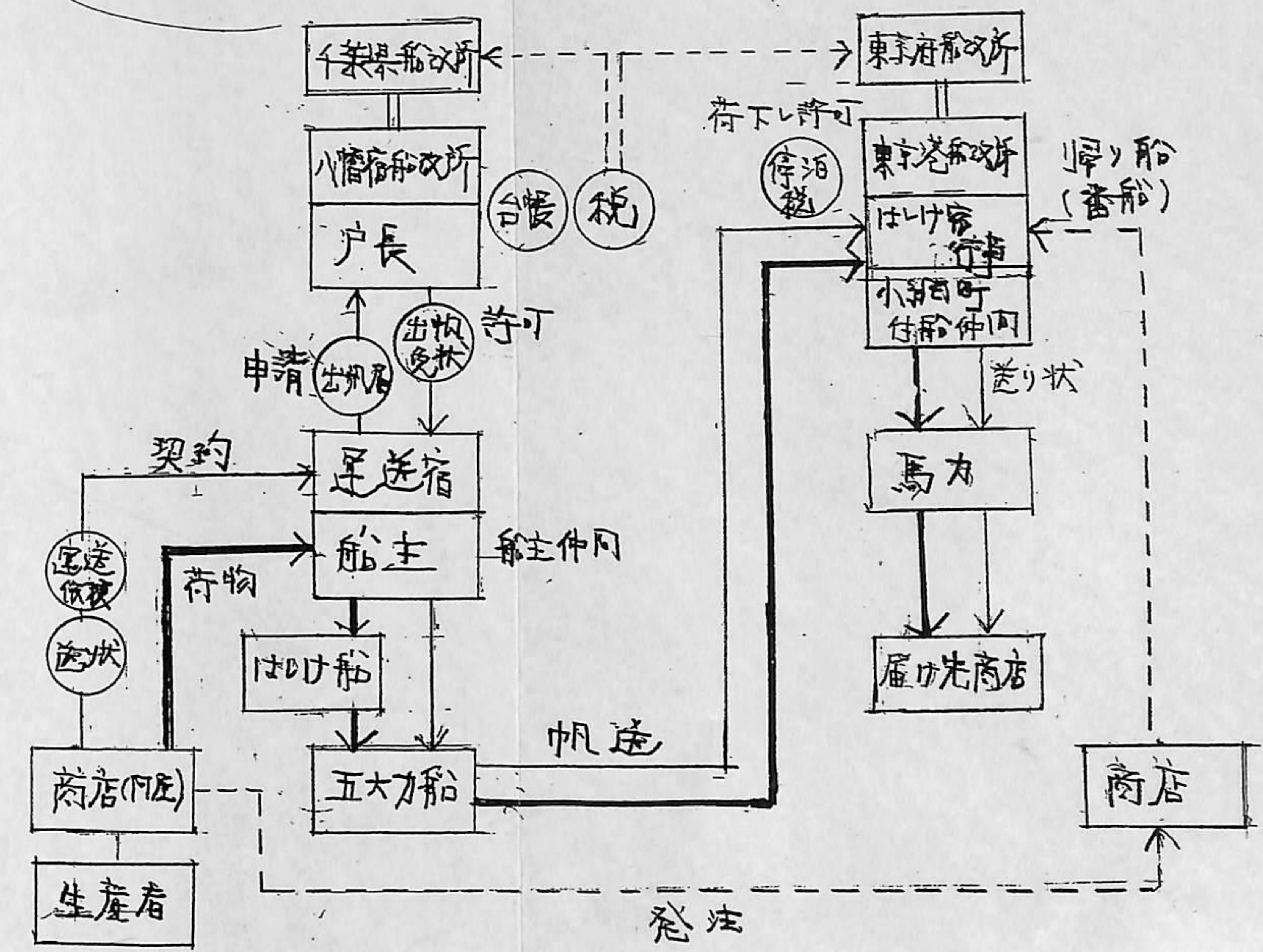
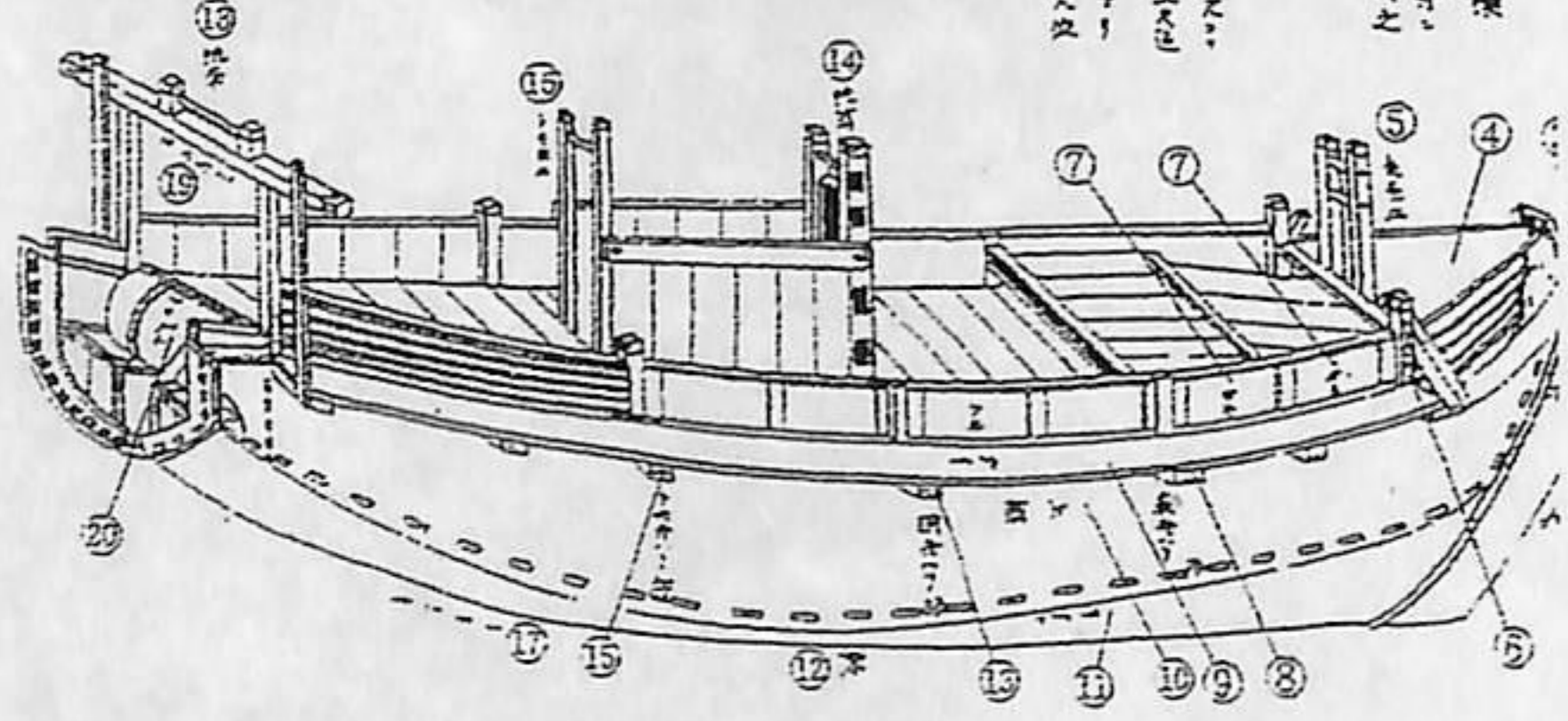
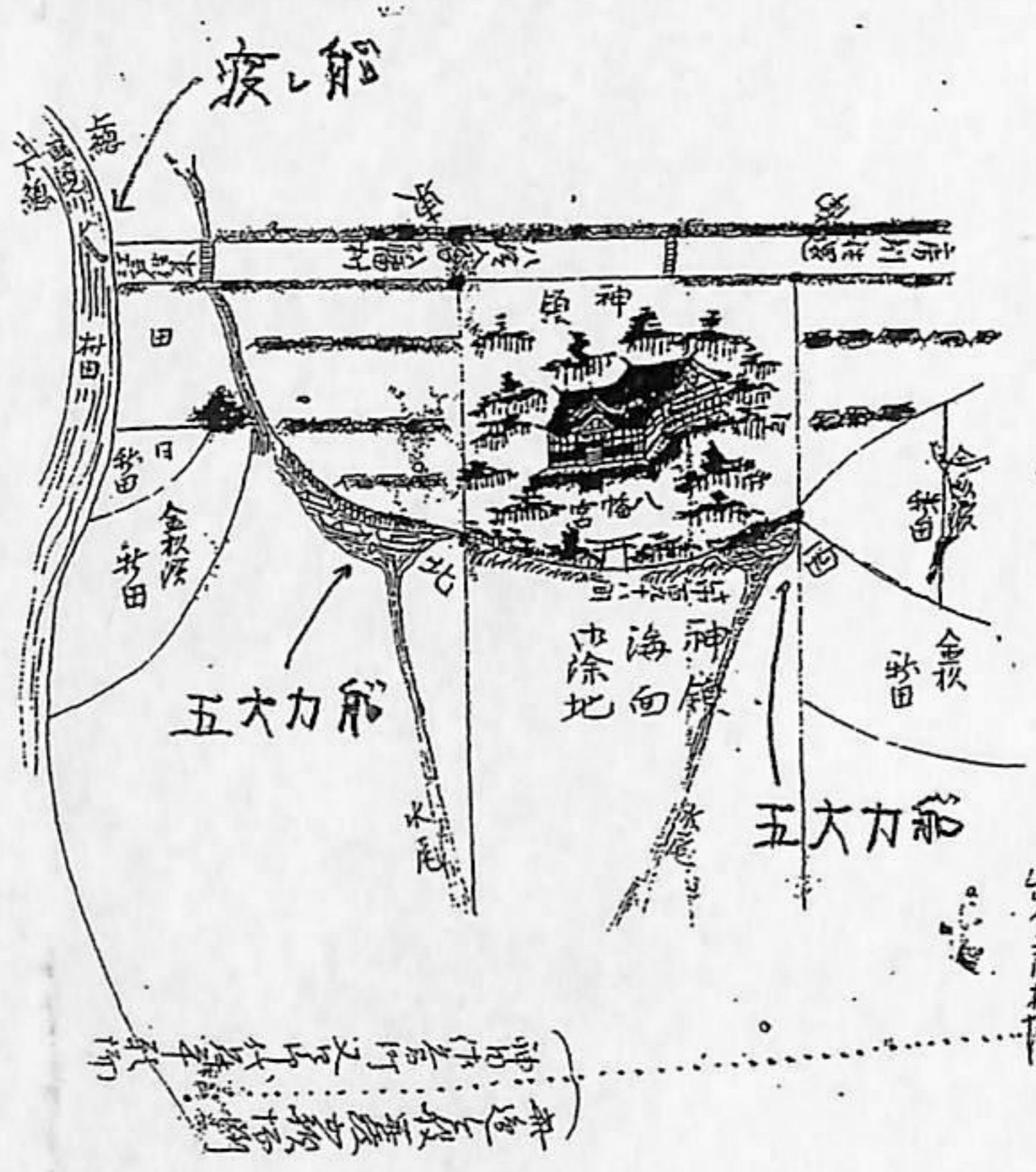


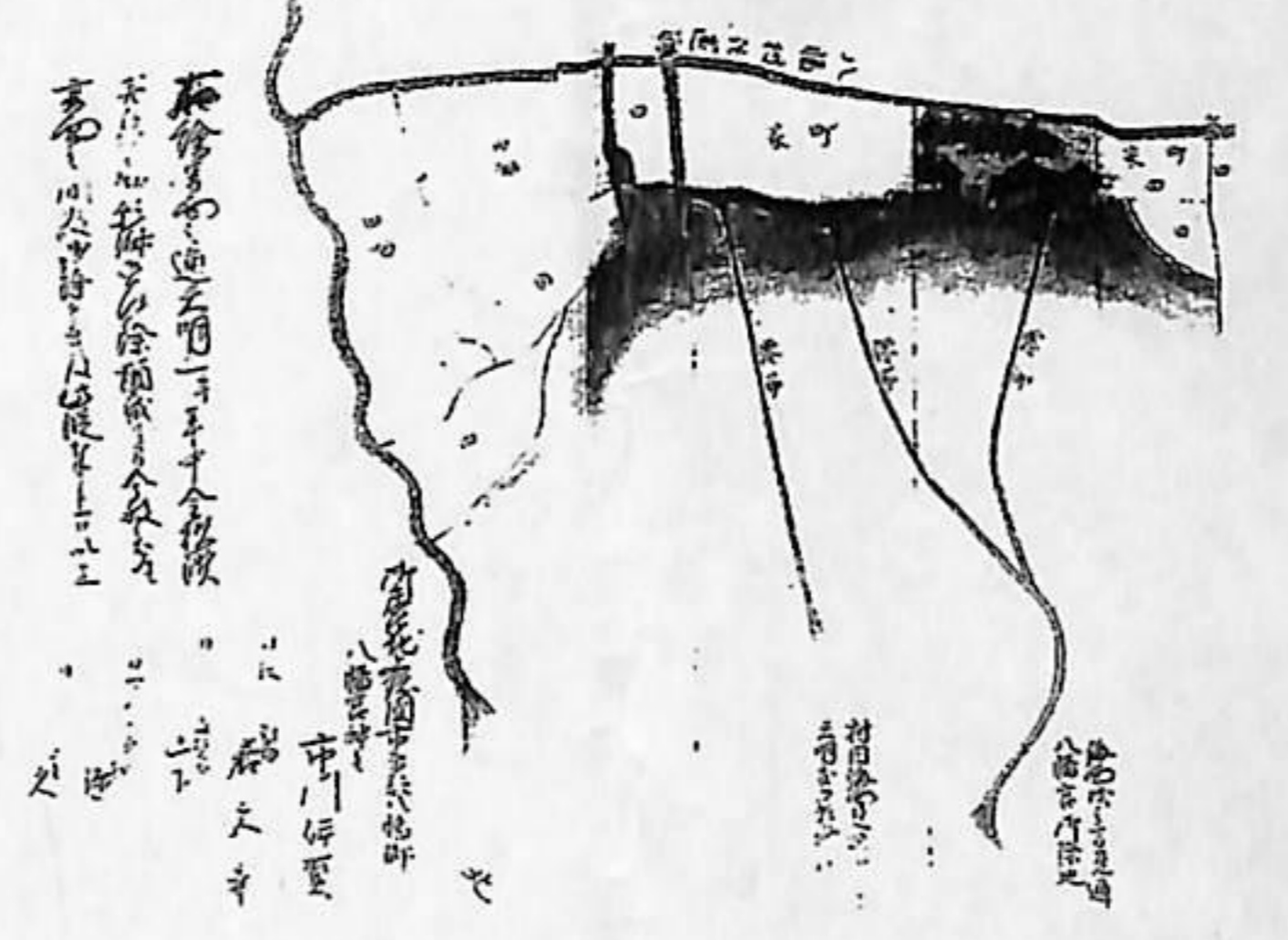
Table with 4 columns: 船名 (Ship Name), 船種 (Ship Type), 船長 (Ship Length), 船幅 (Ship Width). It lists various ship names and their specifications.



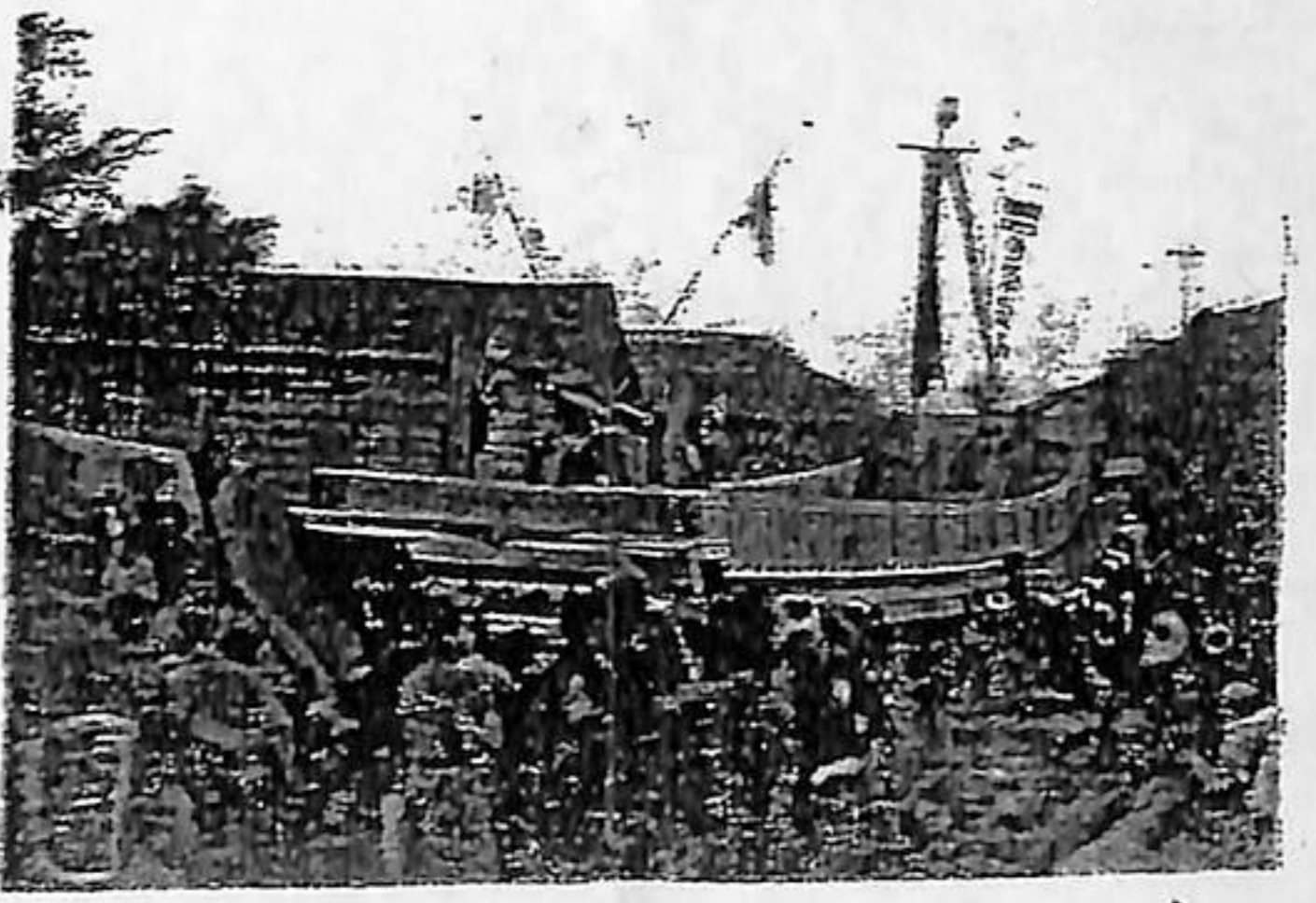
「船鑑」に於ける五大力船



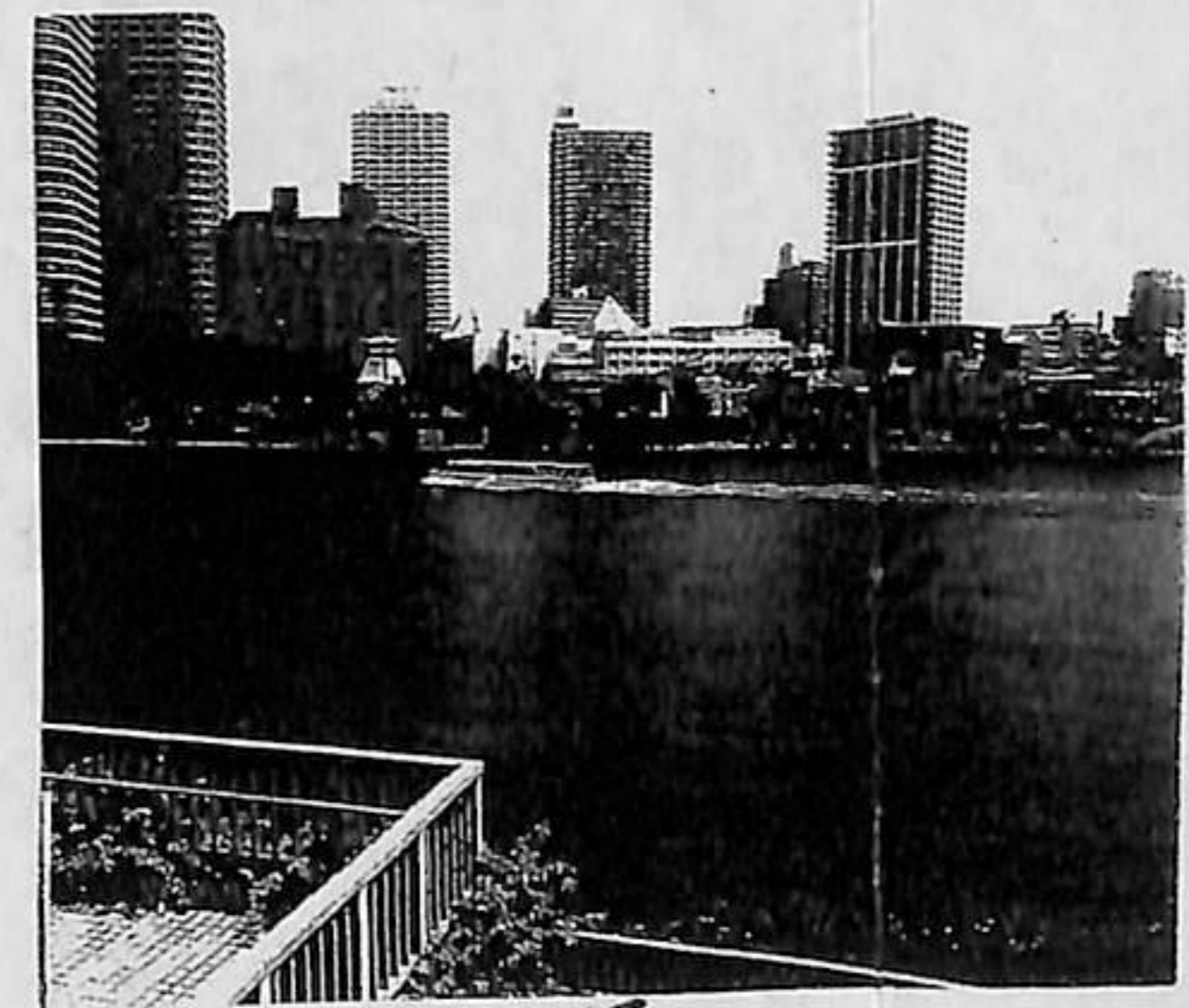
慶応元年八幡村略図



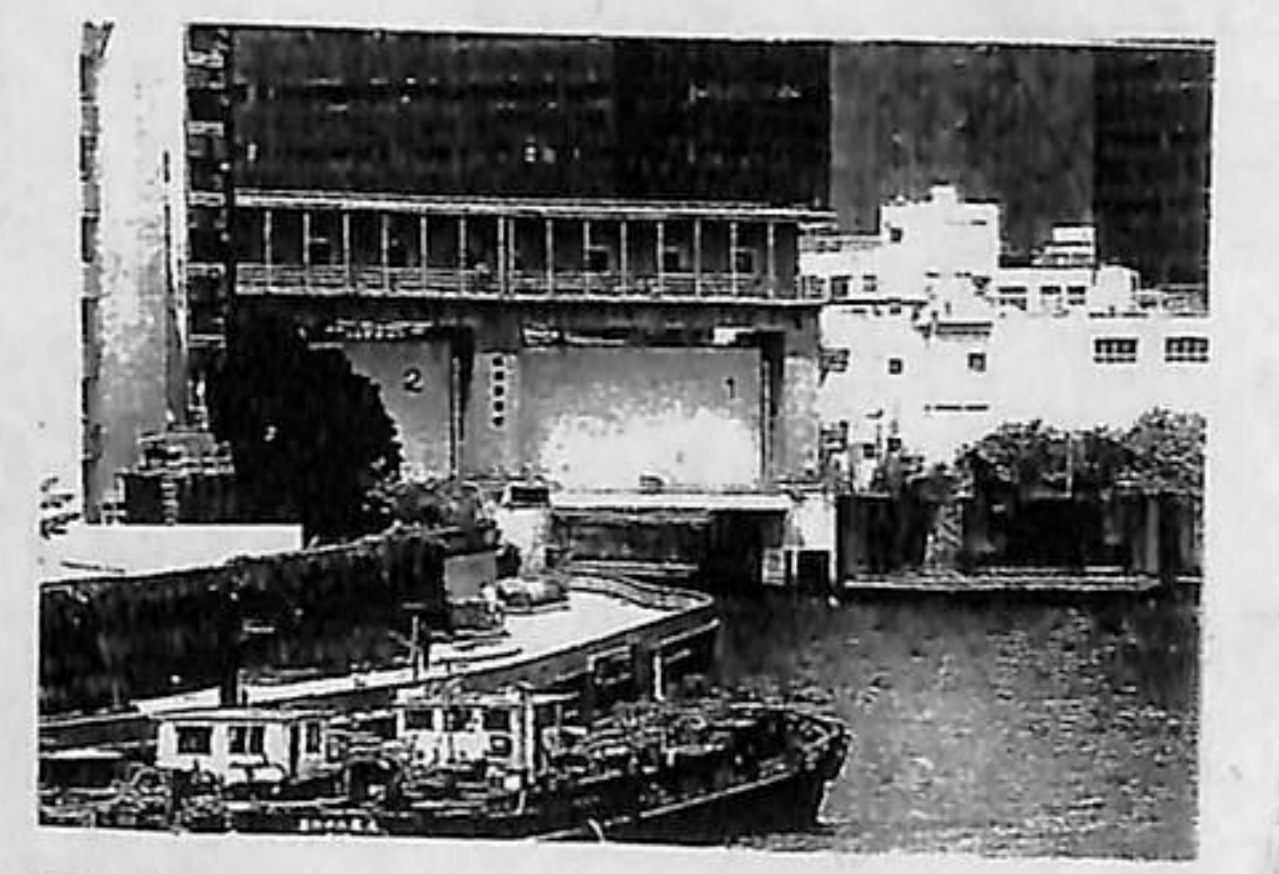
慶応二年「舟方略図」



五大力船の船下し(大正)



佃島



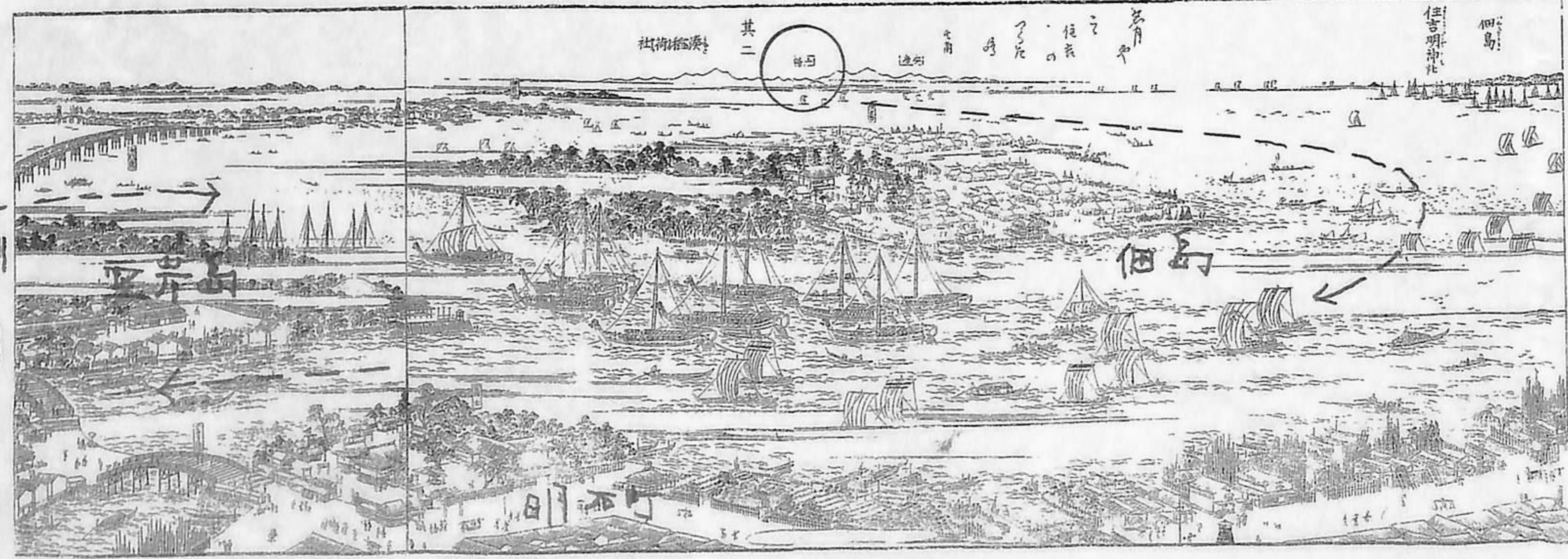
葛島川水門



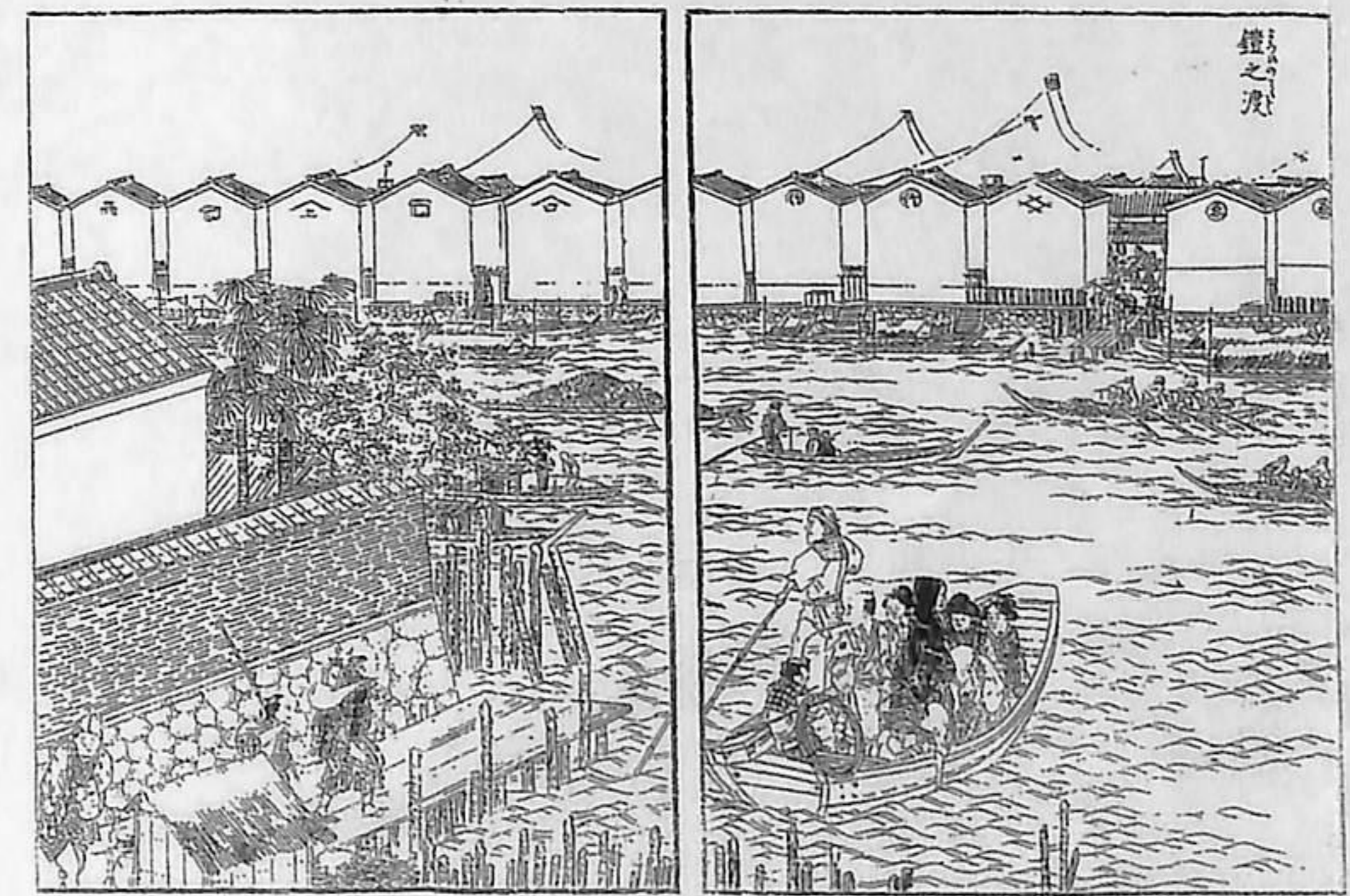
日本橋



小網町



「江戸各所図説」の佃島五大力船がすむ



小網町の船下しと小網町36番